

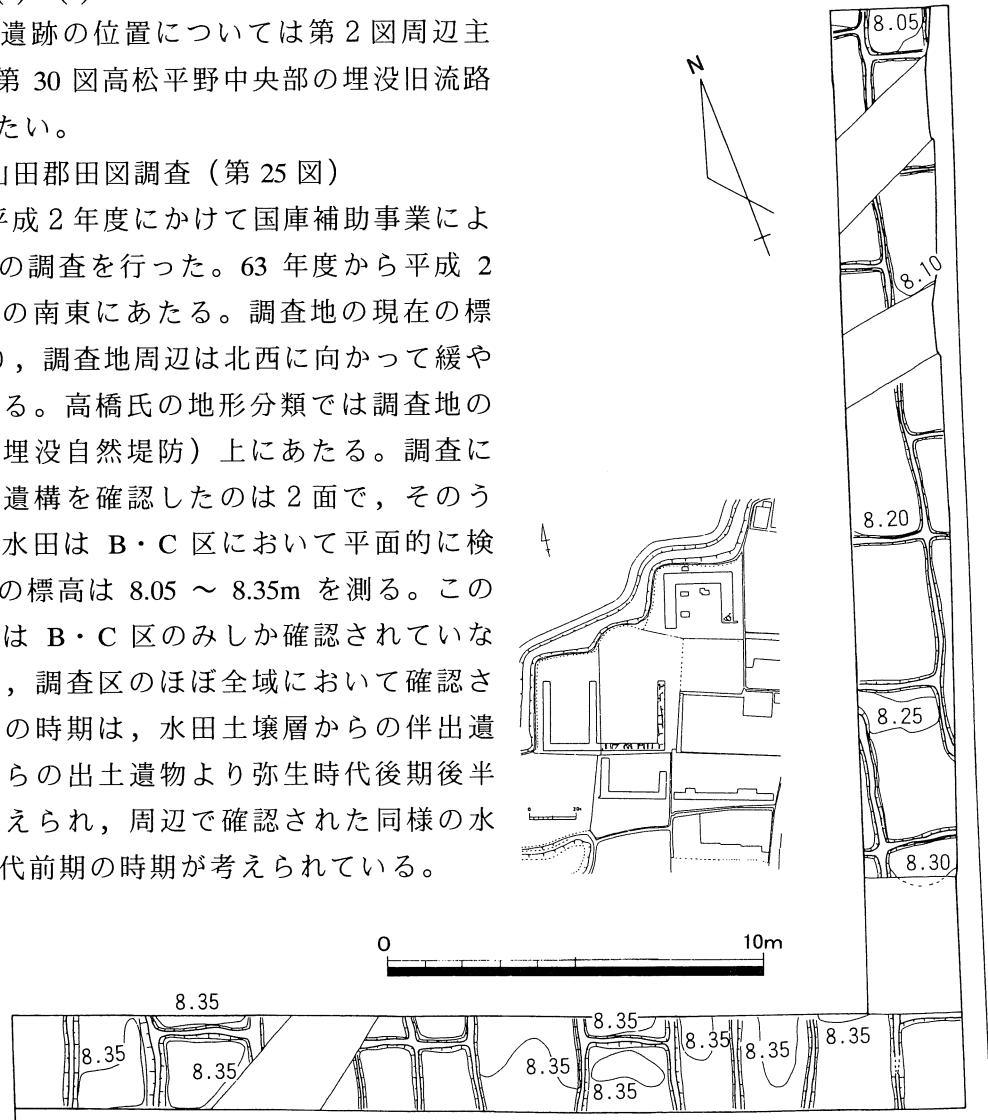
第2節 高松平野中央部における弥生時代前期の水田と集落の動向について

1 上西原遺跡周辺における他遺跡の水田遺構

上西原遺跡は高松平野中央部に位置するが、遺跡周辺では、近年の発掘調査により上西原遺跡と同様な弥生時代の小区画水田など初期水田に関する遺構・遺物が発掘されている。これらの遺構・遺物は、すでに当市教委が刊行した「さこ・長池II遺跡」（高松市教育委員会 1994b）で山元により集成され論じられているが、上西原遺跡の類例が追加されたことにより、改めて各遺跡を紹介したい。(1)～(5)の文章・挿図については、「さこ・長池II遺跡」より引用し、一部を改変した。なお、遺跡の位置については第2図周辺主要遺跡分布図または第30図高松平野中央部の埋没旧流路・低地部を参照されたい。

(1) 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査（第25図）

昭和62年度から平成2年度にかけて国庫補助事業により田図北地区推定地の調査を行った。63年度から平成2年度の調査地は大池の南東にあたる。調査地の現在の標高は9.0m前後を測り、調査地周辺は北西に向かって緩やかに落ちる地形をする。高橋氏の地形分類では調査地の大半は埋没旧中洲（埋没自然堤防）上にあたる。調査において平面的に水田遺構を確認したのは2面で、そのうちIX層で確認された水田はB・C区において平面的に検出している。水田面の標高は8.05～8.35mを測る。この水田遺構は平面的にはB・C区のみしか確認されていないが、土層観察では、調査区のほぼ全域において確認されている。この水田の時期は、水田土壤層からの伴出遺物はないが、上層からの出土遺物より弥生時代後期後半より以前の時期が考えられ、周辺で確認された同様の水田の時期から弥生時代前期の時期が考えられている。

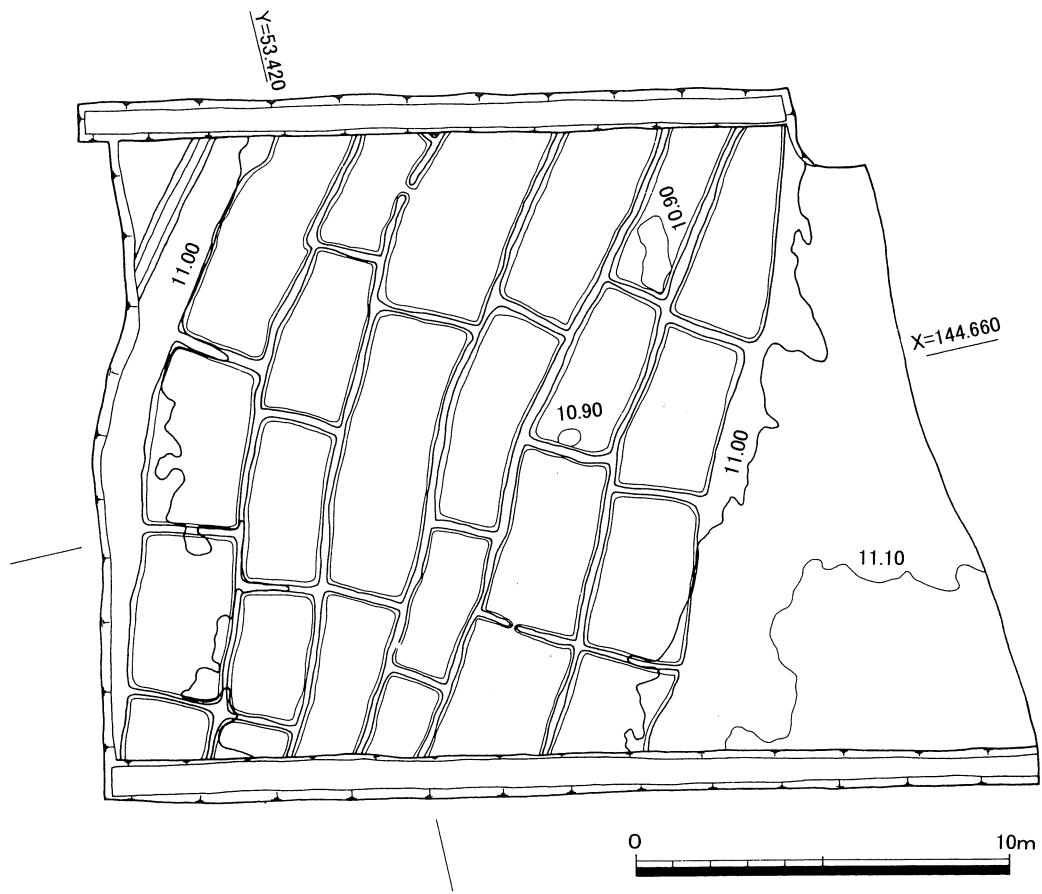


第25図 弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区C区第IX層検出不定形小区画水田(高松市教育委員会1990に加筆)

(2) さこ・長池遺跡（第26図）

平成元年度に調査し、縄文時代晚期から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を確認した。このうち古い時期の水田遺構はSR01西岸の微高地上及びSR02西岸の微高地上で確認されている。これらの水田は高橋氏の地形分類による自然堤防上に位置する。水田の形状は残りのよいSR01西岸の水田は工楽氏の分類によるB類にあたり、残りの悪いSR02西岸の水田遺構についても同様の形状であると考えられる。これらの水田遺構の時期は、SR01西岸で確認した水田遺構を

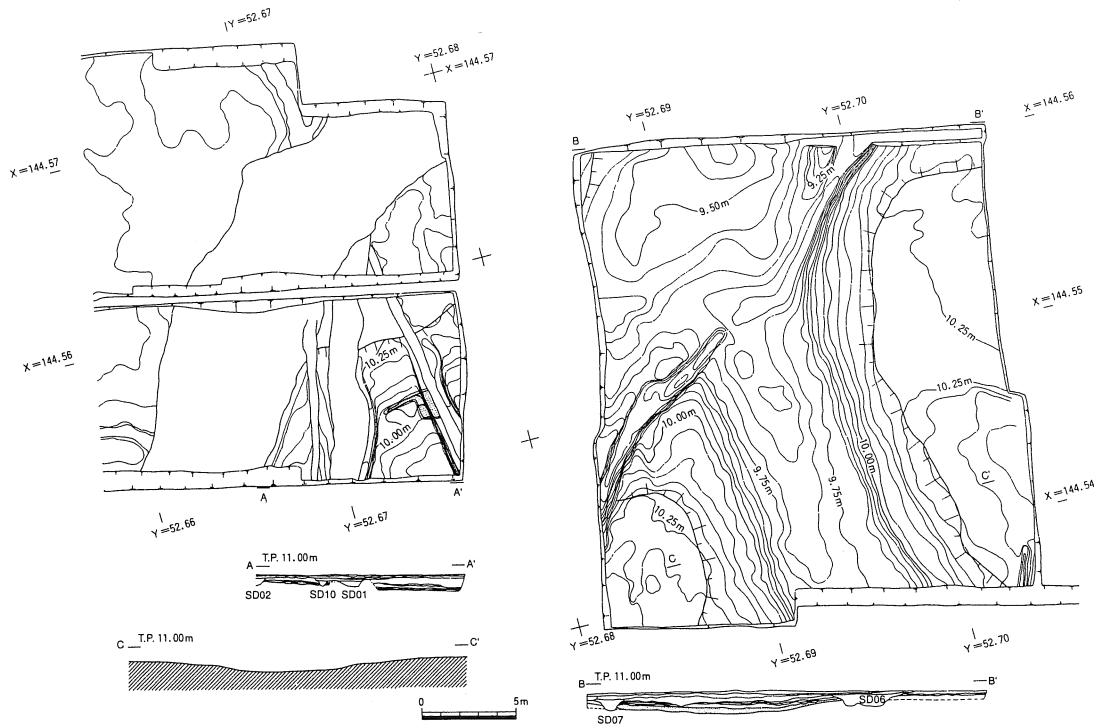
覆う洪水砂層上面から切り込む遺構の最も古いものが、弥生時代前期末の時期であることにより、これよりも古い時期の水田であると考えられる。水田遺構は確認されていないが、SR02からは農耕具と考えられる鋤状木製品が1点、縄文晩期から弥生時代前期にかけての遺物とともに川底より出土している。この鋤状木製品に類似するものが林・坊城遺跡からも出土している。



第26図 さこ・長池遺跡検出不定形小区画水田(高松市教育委員会1993に加筆)

(3) さこ・松ノ木遺跡 (第27図)

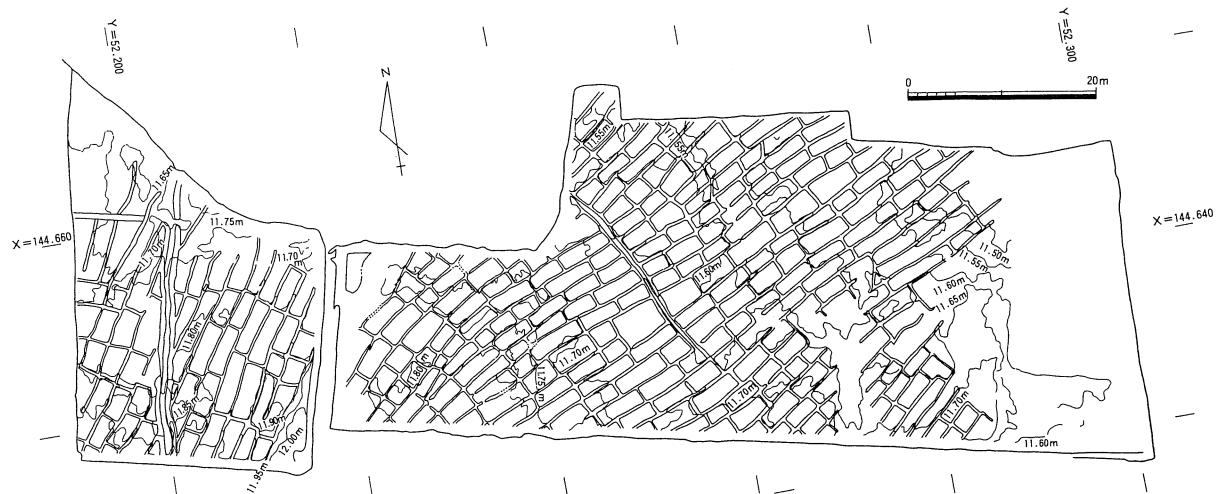
平成2年度に調査をし、弥生時代後期後半から近世にかけての遺構・遺物を確認した。このうち水田遺構と考えられるのは、調査区東端において確認したSX01である。この部分は高橋氏の地形分類では後背湿地部分にあたる。SX01は微高地の帶状低地であり、その底面に堆積している黒褐色極細砂質シルト上面において等高線に平行する畦畔状高まりを確認し、一部上面検出を行っている。畦畔状高まりについては、一部分の範囲についての確認であるため詳細は不明であるが、水田面の検出が9.50～10.25mであり、他の水田遺構に比べ水田土壤層の傾斜が急であるため、遺構の立地は他の水田と同様であるが、水田形状は他の水田と若干異なるものと考えられる。この水田遺構の時期は、上層の洪水砂層の堆積により機能を失っており、この洪水砂層中から出土した土器より、弥生時代前期後葉の時期が考えられ、水田遺構はそれよりも古いものと考えられる。



第27図 さこ・松ノ木遺跡SX01(高松市教育委員会1994aより)

(4) さこ・長池II遺跡 (第28図)

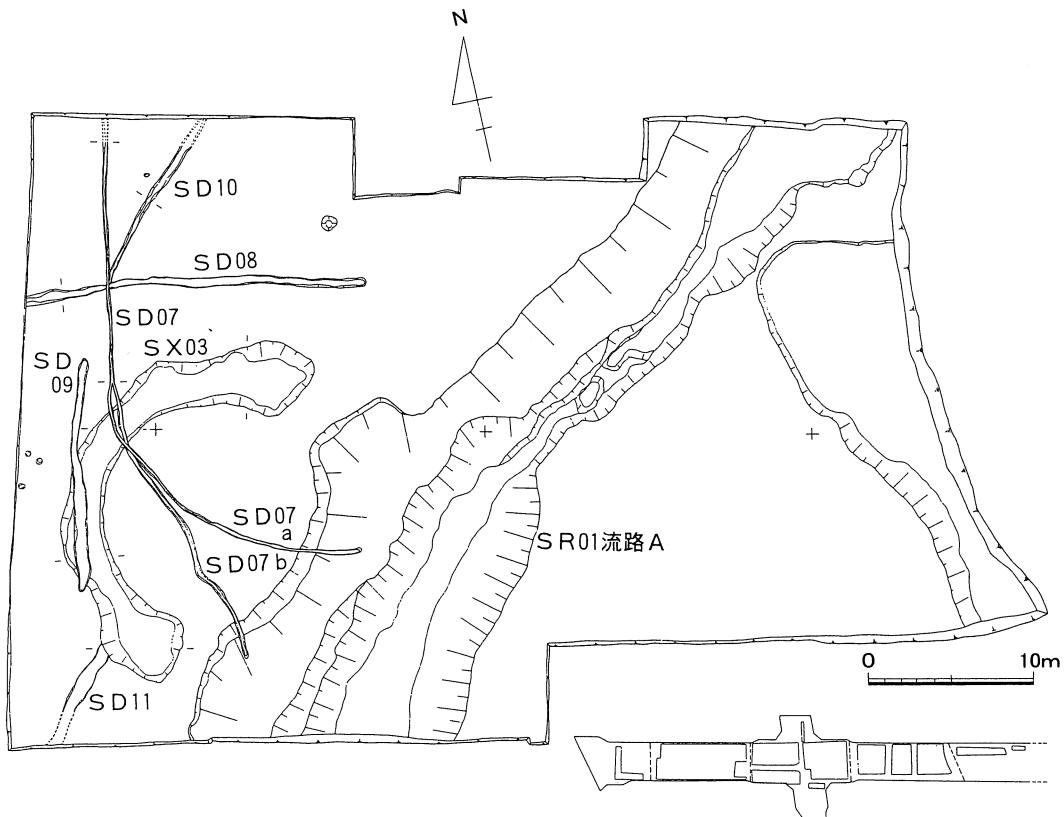
さこ・長池遺跡の西側にあたり、高橋氏の地形分類では、後背湿地から自然堤防上にあたる。水田遺構は調査区東半部の凹地において確認された。不定形小区画が合計315区画確認され、完全な形を保つ水田の平均面積は5.76m²である。各水田への給水方法は、水路が2本あり、一部に水口をもつものがあるが、基本は畦越しによって行われている。水田遺構の東部は途中で断絶するため不明であるが、さこ・長池遺跡西端で確認した水田遺構と同一であると考えられる。この水田遺構も上層に堆積する洪水砂層によって機能を失っている。この水田は水田遺構を切る土坑から出土した遺物より、弥生時代前期後葉と考えられ、水田はそれよりも以前の時期が考えられる。



第28図 さこ・長池II遺跡不定形小区画水田(高松市教育委員会1994bより)

(5) 林・坊城遺跡 (第 29 図)

県道 15 号線の東側に位置する。調査によって縄文時代晚期から近世にわたる遺構・遺物を確認している。注目すべき遺物は、SR01 流路 A から縄文時代晚期の突帯文土器が農耕具（狭鋤、スプーン状木製品）とともに多量に出土している。水田遺構は確認されていないが、前述の流路 A の同時期の堆積物からイネのプラントオパールが確認されていることにより、水田耕作が行われている可能性が高いと想定されている。プラント・オパール分析によると縄文晚期とされる層からは、水生植物の化石が多量に検出されていることから、当時の環境を低湿地や比較的水深の浅い場所に生育していたものと考えている。



第 29 図 林・坊城遺跡 SD01 流路 A (香川県教育委員会 1993 より)

2 各水田遺構の立地環境及び水田遺構の形状について

以上のように、各水田遺構の概要を山元は列挙した後、次のように立地環境と水田遺構の形状をまとめている。

まず、香東川の旧河道別に分けると、先に説明した(1)～(4)の遺跡は高橋氏の分類による旧河道 A の流域にあたり、(5)の遺跡は一本東の旧河道の流域（仮に旧河道 C とする）にあたる。さらに、微地形で分けると、(1・2)は埋没自然堤防上、(3)の SX01 は埋没自然堤防に挟まれた後背湿地部分、(4)は埋没自然堤防から後背湿地部分にあたると分類している。上西原遺跡の場合は、(1)～(4)と同様に旧河道 A の流域にあたり、(1・2)と同じ埋没自然堤防上に立地する。

次に、各遺跡検出の水田遺構の形状を分類すると、(1・2・4)どれもが不定形小区画水田であり、工楽善通氏分類の B 類^(註2)にあたるとした。(1)に比べ(2・4)の区画形状が不正形になっているのは、(1)の等高線があまり入り込まず、地形が等間隔に緩やかに傾斜するのに対し、(2・4)は等高線が深く入り込むために形状が変わったものであると考え、(1・2)は狭い範囲での検出であるため、

このような状況になっているが、広い範囲で水田遺構を検出している(4)では等高線が等間隔な整形に近い部分があることより、両水田は同一の形状であると論じている。上西原遺跡も、同様に不定形小区画水田のB類に分類され、旧河道A流域においては、不定形小区画水田が広く採用されていたと考えられる。

また、山元は各水田への水供給について、(1・2・4)のほとんどが水口をもたない水田であることから、「畦越え」または「掛け流し」と呼ばれる方法がとられたと考えている。さらに、水の供給源についても、工楽氏の考え方や坂出市川津下樋遺跡の類例から、上流に灌漑施設を設けて、そこから水路等で引水したとしている。ただし、川津下樋遺跡の小区画水田は、ほとんどが水口を有することから、給水方法は水口を通して行っている。一方、上西原遺跡はほとんどが水口をもたないことから、「畦越え」または「掛け流し」と呼ばれる給水方法をとっていたと考えられる。

このように比較すると、香東川の旧河道A流域にあたる(1)弘福寺領田図北地区C区第IX層、(2)さこ・長池遺跡、(4)さこ・長池II遺跡、そして上西原遺跡で検出した弥生時代前期の水田は、次のような共通した特徴をもつことがわかる。

①立地は、埋没自然堤防上や埋没自然堤防に挟まれた後背湿地といった比較的安定した土地であること。

②水田の形状は、地形が緩斜面であることから不定形小区画水田を採用していること。

③緩斜面であることから、水の供給方法は「畦越え」または「掛け流し」と呼ばれる方法を採用していること。

これら4遺跡は、径約1kmの範囲内に入ることを考慮すると、同一集団またはつながりの深い複数の集団により、これら水田経営がなされた可能性が考えられる。

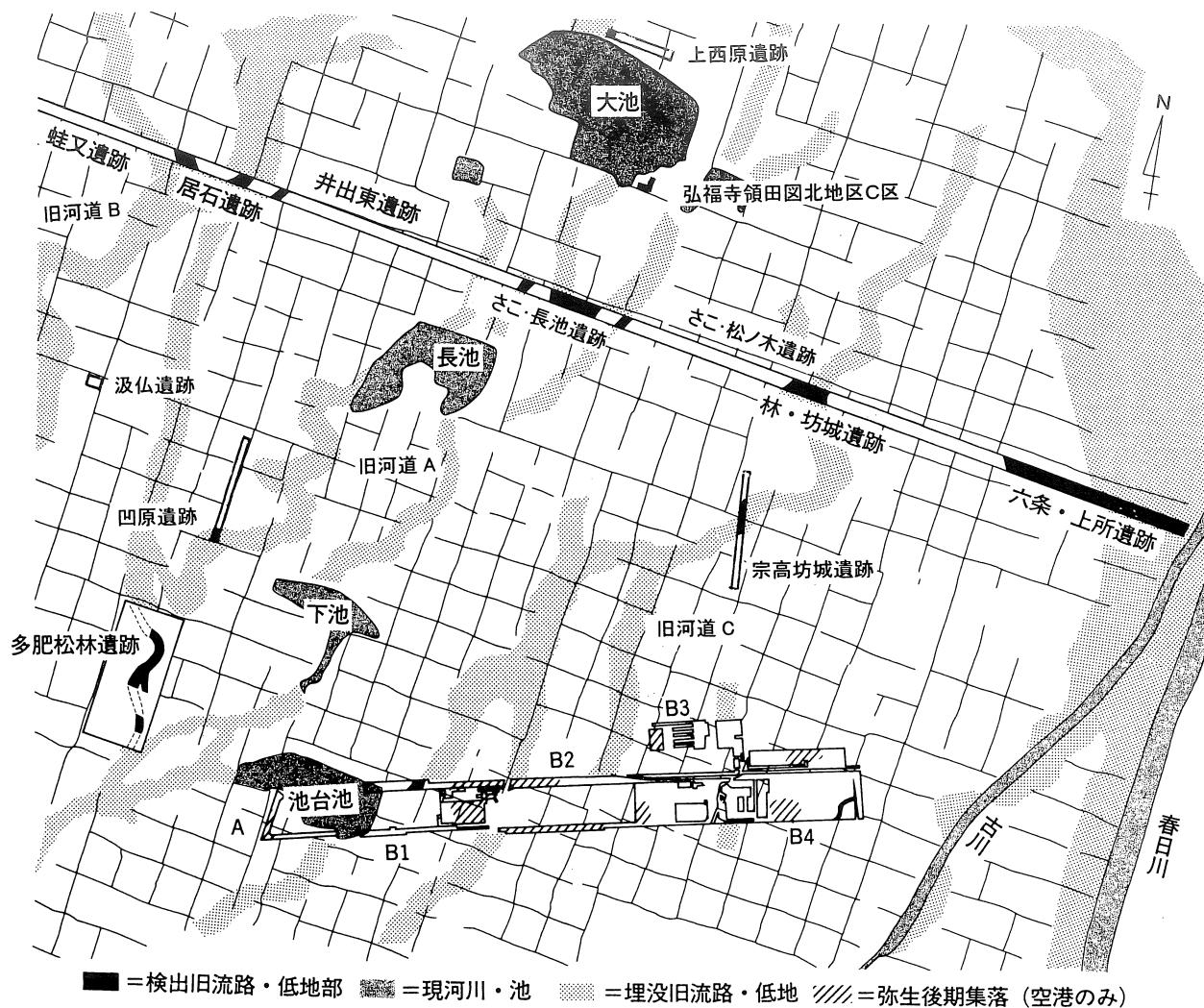
3 弥生時代前期後葉の洪水砂層について

先に紹介した各水田遺構に共通するもう一つの特徴として、どれもが洪水によると考えられる砂層に覆われて廃棄されていることが挙げられる。少なくとも径約1km圏内に所在する水田が洪水により埋没したことは、香東川の旧河道A流域に居住していた弥生人の集団に影響を与えたことは推測できる。ここでは、さらに周辺部の遺跡についても検討してみる(第30図参照)。

同じ旧河道A流域に属する遺跡として、多肥松林遺跡、凹原遺跡がある。多肥松林遺跡(香川県教育委員会 1999)で検出した南北に蛇行する旧河道 SR01 は、まさに旧河道Aそのものである。SR01 は、最下層より弥生時代中期後葉の土器・木器が出土したことから、この頃には流水が停止していたが、それ以前は機能していたと推定されている。また、SR01 より古い流路である SR02 は砂礫層により埋没している。SR01 西側微高地上にある SD01 は、前期後葉^(註1)の細砂層により埋没している。

凹原遺跡では、調査区中央において検出した東西にのびる SD18 は、環濠の可能性をもつ溝だが、厚さ45cmの砂礫層により一気に埋没しており、砂礫層より弥生時代前期後葉の土器片がまとまって出土している。

旧河道B流域では、居石遺跡(高松市教育委員会 1995b) SR01・02 最下層において、縄文時代晩期に属する厚さ30~50cmの粗砂層が確認されている。現在のところ、旧河道B流域では弥生時代前期後葉の洪水による堆積層は確認されていないが、旧河道Bが埋没するのは古墳時代から古代末にかけてである。



第30図 高松平野中央部の埋没旧流路・低地部(香川県教育委員会1997に加筆)

旧河道C流域に属する林・坊城遺跡では、旧河道Cに相当するSR01流路Aにおいて、埋没土層4層中、厚さ約25cmを測る中層が黄褐色細砂・砂質土であり、弥生時代前期頃と推定されている。一方、旧河道Cを掘削した宗高坊城遺跡では、縄文時代晚期の泥炭層の上に、弥生時代後期の堆積層があり、弥生時代前～中期には河道がまだ埋没していないようである。

このように各事例から検討すると、弥生時代前期後葉では、旧河道Bは川として機能していなかった可能性がある。一方、旧河道A・C流域において、前期後葉の洪水の痕跡を確認できるが、旧河道Aの方が旧河道Cより洪水の痕跡は著しく、水田だけでなく集落に付随する溝さえも洪水の堆積層により埋められている。

以上のように、高松平野では、旧河道A流域を中心に、弥生時代前期後葉に大規模な洪水が起き、これにより水田が埋没し、弥生人の生産基盤が一気に失われたと推測できる。また、洪水が直接集落や人間にも被害をもたらした可能性もある。この変化は、集落の盛衰にも現れる。第6表は高松平野の弥生遺跡の一覧だが、前期(I期)では環濠集落が8遺跡も確認されているなど遺跡数が多いが、中期前葉(II期)になると遺跡数は激減し、平野部で確実に集落の存在が確認されているのはさこ・長池遺跡のみである。中期中葉(III期)になると、再び遺跡数とともに

遺跡名	時期						遺構・遺物	性格	立地	備考
	晩	I	II	III	IV	V				
1 屋島城			○	○				散布地	丘陵頂部	
2 奥の坊		○					石器類	集落	丘陵谷部	
3 奥の坊権現前				○			近接棟持柱建物	集落	丘陵緩斜面	
4 大空				○			大空式土器 (64点)	集落	丘陵緩斜面	
5 大空南				○					丘陵緩斜面	
6 小山・南谷				○			製塙土器	集落	丘陵緩斜面	
7 南谷				○			製塙土器	散布地	丘陵緩斜面	
8 新田本村					○				自然河道	沖積平野
9 久米池南			○	○			絵画土器、鉄器	集落	丘陵頂部	高地性集落
10 久米山				○			土器棺	墓	丘陵斜面	
11 諏訪神社	○				○		諏訪神社古墳	集落	低丘陵上	前期環濠?
12 川添浄水場					○			散布地	沖積平野	
13 前田東・中村			○	○				自然河道	沖積平野	
14 木太中村					○			自然河道	沖積平野	
15 大池					○			散布地	沖積平野	
16 天満・宮西	○			○	○			集落	沖積平野	前期環濠
17 天満		○						集落	沖積平野	前期環濠?
18 松縄下所	○						小区画水田	水田	沖積平野	
19 境目・下西原				○					沖積平野	
20 上西原	○								沖積平野	
21 キモンドー				○	○	○		自然河道	沖積平野	
22 上天神				○			大規模灌漑溝	集落	沖積平野	
23 太田下・須川	○	○	○	○	○	○		集落	沖積平野	
24 居石	○	○			○		小型倣製鏡	自然河道	沖積平野	
25 井手東II	○	○						自然河道	沖積平野	
26 井手東I			○		○		木製品	自然河道	沖積平野	
27 淀・長池II		○	○			○	小区画水田	集落、水田	沖積平野	
28 淀・長池		○	○	○	○	○	小区画水田	集落、水田	沖積平野	
29 淀・松ノ木		○	○	○	○	○		自然河道	沖積平野	
30 林・坊城	○	○			○	○	晚期の木製農具、円形周溝墓	自然河道	沖積平野	
31 六条・上所						○		集落	沖積平野	
32 林・淀									沖積平野	
33 林下所	○				○				沖積平野	
34 汲仮	○				○	○		集落	沖積平野	前期環濠
35 凹原		○		○	○			集落	沖積平野	前期環濠?
36 松林	○	○	○	○	○	○	噴礫	集落	沖積平野	
37 多肥松林		○	○	○	○	○	鳥形木製品	集落	沖積平野	
38 日暮・松林		○	○	○	○			集落	沖積平野	
39 多肥宮尻		○	○	○	○	○		自然河道	沖積平野	
40 宮尻上									沖積平野	
41 宮西・一角		○	○			○			沖積平野	
42 一角			○			○		集落	沖積平野	
43 宗高・坊城	○					○		自然河道	沖積平野	
44 空港跡地		○	○	○	○	○	○	集落	沖積平野	
45 光專寺山	○						周溝墓	集落	低丘陵上	前期環濠?
46 中山田				○	○			集落	丘陵頂部	
47 葛谷					○			集落	丘陵斜面	
48 (大原神社)							銅劍 (伝世品)			
49 竹元						○		自然河道	沖積平野	
50 三谷通谷					○	○		墓	丘陵斜面	
51 円養寺						○		墓	丘陵	
52 十川東・平田	○				○			集落	段丘上	
53 下ノ山							銅矛2	散布地	丘陵頂部	
54 摺鉢谷				○	○			散布地	丘陵頂部	
55 松並・中所	○				○	○		集落	沖積平野	前期環濠?
56 奥ノ池						○		散布地	沖積平野	
57 西ハゼ土居	○				○	○	小区画水田	水田	沖積平野	
58 香西南西打	○					○			沖積平野	
59 西打	○					○		集落	沖積平野	
60 鬼無藤井	○	○				○		集落	沖積平野	前期環濠
61 佐料						○		散布地	沖積平野	
62 御厨池						○		散布地	沖積平野	
63 田村神社					○			墓	沖積平野	
64 正箱					○				沖積平野	

第6表 高松平野の弥生遺跡一覧表(○が集落)(大嶋・川部1999より一部改変)

に集落が増えており、後期(V期)以降では集落数が倍増する。このように、前期後葉の洪水が弥生人の生産基盤を奪ったために、集落の減少をもたらしたと考えられる。ただし、この考えに対し、別の考え方^(註3)も成り立つが、程度の差はあれ洪水が平野に住む弥生人に被害を与えたことは事実であろう。

現在、平野部すべての遺跡を調査したわけではなく、調査した遺跡も旧河道A流域に片寄つて多い。今後の発掘調査の進展により、平野各地域ごとの弥生集落の様相が明らかになってくると思われる。

註

- 1)報告書では前期中葉となっているが、実測図を見る限り、前期後葉と考えられる。
- 2)工楽善通氏分類のB類は、「微高地の縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したもので、水田区画は概して小さく、傾斜の度合いに応じて大小に区画され、その形は等高線に左右されて不定形となることが多い。」である。
- 3)別の考え方として、中期前葉(II期)では、建物の遺構が明確に残らないために、集落として把握できない可能性もある。これは、前期(I期)では環壕といった集落を取りまく溝は高松平野で6例以上確認している反面、竪穴住居や掘立柱建物跡など明確な住居を示す遺構は確認されておらず、前期の住居は遺構として残りにくいものであった可能性がある。環壕は前期末には消滅する。一方、遺構として確認しやすい竪穴住居は中期中葉(III期)では数多く確認されている。このように考えると、中期前葉(II期)の遺跡は、集落として把握できにくい可能性がある。

参考文献

- 香川県教育委員会 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 林・坊城遺跡』
香川県教育委員会 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十一冊 川津下樋遺跡』
香川県教育委員会 1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 空港跡地遺跡II』
香川県教育委員会 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』
高松市教育委員会 1990『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地発掘調査概報III』
高松市教育委員会 1993『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊
さこ・長池遺跡』
高松市教育委員会 1994a『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊
さこ・松ノ木遺跡』
高松市教育委員会 1994b『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊
さこ・長池II遺跡』
高松市教育委員会 1995a『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 蛙股遺跡』
高松市教育委員会 1995b『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 居石遺跡』
大嶋和則・川部浩司 1999「高松平野における集落の様相」『みづほ』第30号 大和弥生文化の会
工楽善通 1991「水田経営の立地と区画」『水田の考古学』東京大学出版会